

「わたしの旅 ～日本の歴史と文化をたずねて～」

【個人での応募】

○氏名 渡辺恭伸
○連絡先

- ・住所 (略)
- ・電話番号 (略)
- ・FAX (略)
- ・E-mail cotton@ma-museum.com

【プランの内容】

1. あなたの旅のテーマを教えてください。

20世紀初頭、外国人建築家が見た日本をめぐる旅

ポイントは次の3点。

1. 20世紀初頭に日本を訪れた外国人建築家（フランク・ロイド・ライト、アントニン・レーモンド、ブルーノ・タウト）と日本の関わりをたどる
 - ・ 外国人建築家が見た日本はどのような風景だったか
 - ・ その建築家たちは、どういう建築・影響を残していったか
 - ・ 今、その風景と、建築は、どうなっているか
2. 企業者が文化貢献をした歴史と、今日的意義を考える
それらの建築家を結ぶ位置に井上房一郎という実業家がいた。
高崎・群馬の文化の発展に大きな貢献をしたあとを見る。
3. 「建築を見る旅」という提案

2. 誰と一緒に旅に行くのですか？

1人でも。同じ関心のある友人とでも。
日本人にとっても、外国からの旅行者にとっても、知的刺激をそそる旅。

3. あなたの旅のプランを教えてください。

- | | |
|---------------|-------------|
| (1) 旅の日数 | 6泊7日(基本として) |
| (2) 訪れたい時期・季節 | とくに限定はない。 |

4. この旅をお薦めする理由、またはこの旅にまつわる「物語」や「思い出」などを教えてください。

「パトロンと芸術家ー井上房一郎の世界ー」という企画展が、1998年に群馬県立近代美術館と高崎市美術館で開かれた。

それまで全く知らなかったのだが、井上房一郎は、群馬県立近代美術館や、群馬音楽センターと群馬交響楽団の設立をすすめるなど、高崎と群馬の文化の発展に大きな貢献をした人だった。経営者とはいえ、1地方企業のことだから、独力で音楽センターや美術館を建てられるほどの資力はないが、人々の関心を高め、資金を集め、理想を現実化していった意思や戦略に驚かされた。

ブルーノ・タウトやアントニン・レーモンドとの関わりなど、その軌跡をたどりだして見ると、次から次へと興味をひかれること、知りたいことが広がっていった。

いくつかキーワードふうにあげてみると

明治開国後の日本文化 関東大震災 1930年代の社会
戦時の建築家の対応 近代建築 まちづくり

内村鑑三 萩原朔太郎 竹久夢二 山田かまち 磯崎新 など

おかげで、このテーマに関わらなければ出会わなかったろう人と書物でも出会い、実際にお会いもし、読まなかったろう本を読み、行かなかったろう土地へでかけた。世界が広がった思いがする。

コースに設定したなかで、

- ・ドイツを逃れてきたタウトが着いた敦賀港に、国内線フェリーで入港してみる
- ・タウトが日本滞在中に残した唯一の実作、「旧日向邸」は、平成17年9月から公開される

など、まだ自分でもためしていないこともあり、楽しみは続いている。

このコースの旅からは、誰もがそれぞれの関心に応じておもしろいと感じるテーマをひきだせるだろうという思いがあって、主要な場所を結んで周遊コースにまとめてみた。

外国人にとっても、70年前に欧米から来た人がどう日本を見、どのような影響を残したかを知りながら旅することは、複層的に日本を見る充実感をえられることと思う。

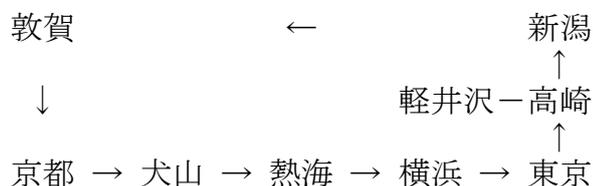
5. 具体的な旅の行程

○旅のテーマ 20世紀初頭、外国人建築家が見た日本をめぐる旅

○応募者名 渡辺恭伸

【全行程 6泊7日の概要】

I コースの概略



- ・ 主要な関係地を選んで周遊コースにした。
(以下の日程の記述は、東京基点にしている)
- ・ 日帰りや、1泊、2泊などに分割して旅することもできる。
- ・ 6泊7日で設定したが、余裕があって各地で他の見どころにもゆっくり寄れば、なお楽しくなる。
- ・ 強行日程を組めば、日数の短縮も可能。

- ・ 新潟→敦賀のフェリーは毎日運行ではない。
- ・ 京都での桂離宮見学には事前の予約が必要。
- ・ 熱海の旧日向邸は、平成17年9月24日から一般公開される。

II 費用概算

1 交通費	約 50,000円	(新幹線はふつうの感覚で利用。フェリーの船室は中程度。)
2 宿泊費	約 75,000円	(1泊15,000円×5泊として。あと1泊はフェリー内。)
3 美術館等入館料	約 4,000円	(企画展等により異なる)
合計	約129,000円	

旅の行程 (訪問先等)	訪問先の特色	旅のテーマに即した 選定の理由
高崎駅からバス		
少林山達磨寺	高崎郊外の古刹。正月のだるま市で名高い。	ナチスのドイツから逃れてきたタウトを、井上房一郎が世話して、ここの洗心亭という小さな住居に住まわせていた。(1934-1936年)
↓ バス		
群馬音楽センター	市の予算のほかに、市民からの多額の寄付により建設された。前庭に「昭和三十六年ときの高崎市民之を建つ」という碑がおかれている。	井上房一郎と親交があったアントニン・レーモンドが設計した。市民からの寄付も、井上の考え方をもとにしている。
↓ バス		
群馬県立近代美術館	県立美術館としては、神奈川に次いで早い時期、1974年に開館した。建築家・磯崎新の初期の代表作でもある。	井上が音楽の次に目標としたのは美術。自社にギャラリーを開くなどして機運を盛り上げていき、美術館の設立につなげた。
群馬県立歴史博物館	美術館に隣接して、5年後の1979年に開館した。大高正人設計で、美術館とつながっている。	音楽、美術と構想を実現した井上房一郎の次の目標は「歴史」であった。
↓ バス		
高崎哲学堂	レーモンドの都内の自邸が焼失した後、同じ設計で井上が自邸を建てた。没後、市の管理となり、講演会などが開催されている。	音楽、美術、歴史と実現した井上の最後の目標は哲学の拠点を作ることだった。新設はかなわなかったが、没後、邸宅が哲学堂に転用された。
(宿泊) 高崎市内		

旅の行程 (訪問先等)	訪問先の特色	旅のテーマに即した 選定の理由
高崎駅ー(新幹線利用など)→軽井沢駅 このあとのこの日の移動は、 ①「軽井沢美術館・観光循環バス」があるが、時間がうまくあわなければ、 ②タクシーも利用。 ③レンタカー、貸し自転車など利用もできる。		
星野リゾート	1904年に軽井沢開発を始めた リゾート業の老舗。 温泉、レストラン、野鳥観察の 森、高原教会などがある。	井上家はここに別荘を持っていた。信州の画家、山本鼎とこ こで出会い、芸術が社会に役割を 果たすことを教えられ、のちの 井上の活動の契機となった地で ある。
ペイネ美術館	レーモンドが軽井沢での夏の住 まいに作った(1933)。ル・コ ルビュジェから盗作であると抗 議されたが、また、土地柄にあ わせてよく作っていると評価も された。 今は、フランスの画家ペイネの 美術館になっている。	軽井沢では、井上は工芸の店ミ ラテスを開店。そこに買物にき たレーモンドと知り合うことと なった。 のち、タウトと知り合ってから は、タウトがデザインした製品 も販売した。
聖パウロ教会	レーモンド設計(1934)。旧軽 井沢の中心地にあり、観光地と しても有名。結婚式にもよく使 われている。	井上に関わる木工組合が椅子を 納品した。
(宿泊) 軽井沢		



第1日目
高崎哲学堂
(井上房一郎旧邸)

【第3日目】 □□■□□□□ 3/7

旅の行程 (訪問先等)	訪問先の特色	旅のテーマに即した 選定の理由
<p>引き続き軽井沢を見たあと、高崎駅経由で新潟駅。 または新潟駅に移動後、新潟市内などを見る。 夕刻、新潟港から敦賀港行きフェリーに乗船。 (宿泊) フェリー内</p>		

【第4日目】 □□□■□□□ 4/7

旅の行程 (訪問先等)	訪問先の特色	旅のテーマに即した 選定の理由
敦賀港着	<p>ナチスのドイツから逃れてきたタウトは、ウラジストックから船に乗り、1933年5月3日に敦賀港に着いた。 国内線フェリーで代用だが、70年以上前の建築家の旅をしのびながら敦賀港に入ってみる。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>遙かに日本の海岸を望み見る。やや近づくと緑の山々。これまで見てきた国土とはまるで違った新しい国土だ。(中略) 多彩な色、緑、なんという景色だろう！かつて見たことのない美しさだ。虹のように輝く水、まったく新しい世界である。敦賀湾、赤と白との閃光を放つ二基の燈台。敦賀の街が低く見える.. (タウト日記)</p> </div>	
↓電車・バス	(タウトは敦賀で夕食をとったあと京都に行き、泊。翌日桂離宮に行った。ここではその日のうちに直行する。)	
桂離宮	<p>17世紀に作られた京都の名園。 タウトはたまたま53歳の誕生日に訪れ、「今日は恐らく私の一生のうちで最も善美な誕生日であったろう。」と記した。 その感動を記した著書は多く読まれ、タウトは桂離宮と日本美の再発見者といわれることとなった。</p>	
(宿泊) 京都		

旅の行程 (訪問先等)	訪問先の特色	旅のテーマに即した 選定の理由
<p>↓電車・バス</p> <p>博物館明治村</p>	<p>(京都・名古屋・犬山経由)</p> <p>古い建築を壊すとそこに関わった人の記憶も失われるから、できるだけ残そうと考えた建築家・谷口吉郎は、金沢の旧制四高時代の級友、土川元夫に協力を求めた。名古屋鉄道の副社長をしていた土川が、犬山の土地を用意し、1965年に明治村が開設された。 各地の特徴ある明治建築が移築されている。 1967年にライト設計の帝国ホテル解体が発表されると、保存運動が起き、明治村に一部が保存された。</p>	<p>帝国ホテルの建設にあたり、ライトはレーモンドを伴って来日した。レーモンドがその後に井上房一郎と組んでいくつもの文化施設を残すきっかけとなった建築。 帝国ホテルは1923年、関東大震災の日に関業した。 10年後に、タウトが訪れ、仰々しい寺院のようで、階段は迷路で、空間の使用が非経済的だと批判した。 ライトもタウトも日本文化に深く傾倒したのだが、実作にはこのように評価がわかれた。 訪れる人はどう感じるか、それぞれに楽しみがある。</p>
<p>(宿泊)</p> <p>犬山・名古屋</p>		

第5日目
帝国ホテル正面玄関
(博物館明治村)



旅の行程 (訪問先等)	訪問先の特色	旅のテーマに即した 選定の理由
↓電車	(熱海経由)	
日向別邸	<p>生糸の貿易などで財を成した「日向利兵衛」の別邸。内装の一部をタウトが設計した。</p> <p>日向氏の死後、民間企業の保養所となっていたが、熱海市の所有となり、2005年9月24日から一般公開される。</p>	<p>タウトは日本に3年半滞在したが、建築家としての仕事は稀だった。タウトはこの仕事のできばえにはとても満足し、1936年に、招聘されたトルコに旅立った。</p> <p>(日本での「休暇」を取り戻すように精力的に活動したが、1938年に急逝した。)</p> <p>タウトが日本に残した唯一の建築的実作は、長く一般には見ることができなかつた。一般公開されるのを機に、ぜひ見に行きたい。</p>
(宿泊) 熱海		

第7日目
横浜港大栈橋



旅の行程 (訪問先等)	訪問先の特色	旅のテーマに即した 選定の理由
↓電車	(横浜経由)	
横浜マリタイム ミュージアム	横浜港を中心として、港と船を テーマに扱う博物館。 帆船日本丸も美しい。	1859年に開港して以来の横浜 港の変遷を展示してある。1919 年にライトとレーモンドが入港 したときの横浜港の様子をし のぶ。
横浜港大栈橋	国際コンペで選ばれた foa 設 計により、2002年に新しい栈 橋が造られた。コンクリートの 岸壁のイメージを覆すデザイン で、木のデッキが丘陵のよう になだらかに波打って、斬新な港 の風景が生まれている。	時代の移り変わり、現代の建 築の最先端の表現にふれる。 Foa は、イラン生まれの F.ム サヴィと、スペイン生まれの A.Z.ポロが組む建築家グル ープ。今も外国人建築家により、 新しい日本の風景が作られつ つあることを見る。
↓ 東京	<p>旅の出発点とした東京へは、思い思いの交通手段で戻る。 1919年の大晦日、レーモンドは初めての来日の忘れがたい印象 を記している。 当時の日本の様子、はるばるやってきた建築家の思いを想像しな がら、東京に向かう。 レーモンドにとっては新しいキャリアの始まり、その人たちの足 跡をたどってきた者には、ひとまずの旅の終わり。</p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p>1919年、12月31日の、日本到着の夜、横浜から東京ま での道、封建時代の名残りとどめた狭い村を、車で通っ たことを私は決して忘れることができない。 その村々の道の両側には、しめかざりの環や、提灯がぶら さがった松や、竹が並んでいて、陽気で、単純な喜びの雰 囲気に包まれていた。商店は道に向かって開け放たれ、売 る人買う人共々、茶をすすり、火鉢に手をかざしながら親 しげに座っていた。派手な着物の若い人々は、道の真中に 陣取って、いろいろ楽しそうな季節の遊びにふけり、私達 の車は殆んど進めないほどであった。 (私と日本建築 アントニン・レーモンド 三沢浩訳 鹿 島出版会 1967)</p> </div>	

資料

I 略年表 (コース中の事項を年順に整理すると次のようになる)

(9/1 は、9月1日の略)

1919	井上房一郎：星野温泉の井上家の別荘の近くに山本鼎のアトリエができ、交流が始まる。井上房一郎は山本の自由画教育運動に共鳴。留学を勧められる。 ライトとレーモンド：帝国ホテルの仕事につくため来日
1923	帝国ホテル開業 9/1
1933	タウト：ドイツ脱出 3/1 敦賀着 5/3 桂離宮訪問 5/4 帝国ホテル泊 5/18 井上房一郎：軽井沢にミラテス開店。ノエミ・レーモンドがミラテスを訪れ、その夫アントニン・レーモンドとも知り合う。 レーモンド：「軽井沢夏の家」(現「ペイネ美術館」)
1934	井上房一郎とタウト：久米権九郎の紹介で銀座で会う。タウトは井上工芸研究所顧問として高崎に行くことに決定。 タウト：少林山達磨寺洗心亭に住む 8/1 レーモンド：「聖パウロ教会」(軽井沢) 井上が関わる高崎木工制作配分組合が椅子を受注。
1936	タウト：吉田鉄郎と「日向別邸」内装を設計、竣工。 タウト：少林山を出る 10/8 下関を発つ 10/15 (トルコへ)
1961	レーモンド：「群馬音楽センター」
1965	博物館明治村開業
1967	帝国ホテルの一部を博物館明治村に移築
1974	磯崎新：「群馬県立近代美術館」
1979	大高正人：「群馬県立歴史博物館」
1993	井上房一郎：死去
2002	旧井上房一郎邸に財団法人高崎哲学堂発足 (横浜港大棧橋竣工)
2005	旧日向邸、一般公開開始 9/24

II 関係する人と、その生没年

1898-1993	井上房一郎
1882-1946	山本鼎
1867-1959	フランク・ロイド・ライト
1880-1938	ブルーノ・タウト
1888-1976	アントニン・レーモンド

III 基礎的参考資料

- 私の美と哲学 井上房一郎 あさを社 1985
 日本美の再発見 ブルーノ・タウト 篠田英雄訳 岩波新書 1962
 日本-タウトの日記 ブルーノ・タウト 篠田英雄訳 岩波書店 1975
 私と日本建築 アントニン・レーモンド 鹿島出版会 1967
 自伝-ある芸術の形成 フランク・ロイド・ライト 樋口清訳
 中央公論美術出版 1988